

巻頭言 関係と超越

著者	清水 正之
雑誌名	聖学院大学総合研究所紀要
号	No.63
ページ	3-6
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00003050/

巻頭言 関係と超越

聖学院 大学 学長
聖学院大学総合研究所副所長

清水 正之

『人生の意味——キリスト教への問いかけ』という本に編集者の一人として携わっている。この企画の主題は、キリスト教への問いかけとなっており、キリスト教からの問いかけあるいは答えを先立たせるものではない。当然にそれは、異なる宗教的・哲学的立場からのキリスト教への問いかけを念頭に置きそれに応答するという形になるだろう。

近代日本において、キリスト教への問いかけに関わる事柄を、哲学や倫理学の領域から振り返るなら、数多くの思想家あるいは思想的骨格を持った文学者の、キリスト教に寄せた関心はそのなかの重要な一コマであろう。キリスト教が、あらたな「気づき」と「啓かれ」を与えることとなった。キリスト教をこの社会で、内向きでない対話的な在り方のなかで鍛えるためには、その過程の思想的考察はむずかしいがおろそかにできない事柄の一つである。

気づきと啓かれのなかの一つは、人間の関係に関わる事柄である。夏目漱石の『三四郎』（明治四十一年）に、三四郎が「会堂」^{チャーチ}から出てくる美禰子に出会う場面がある。美禰子は研究に没頭す

る野々宮との関わりの齟齬などの屈託を抱えている。彼女の魅力は三四郎の心にも波紋をなげる。美禰子は「われは我が咎を知る。我が罪は常に我が前にあり」（詩編第五一篇）という旧約聖書の言葉を残して去っていき、後日別の男性と結婚する。三四郎が、これも美禰子から以前に教えられた「迷羊^{スレイプ}」を繰り返す場面で、小説は幕を閉じる。『三四郎』から『それから』あたりの作品は、他方で近代の批判、近代日本の文明開化の皮相さを痛烈に批判する人物を登場させるが、同時に人間の相互的な関係こそが、そうした批判者自体を再度俎上に載せる構造を持っている。批判者もまた近代の病であるエゴイズムと無縁でないからである。江藤淳らがその漱石論で「原罪意識」と呼ぶものがたしかに揺曳する。夏目の場合、その思想的骨格の部分は、それ以上深まることなく、いわゆる則天去私という境地、アジア的な超越観に収束したといえるだろう。しかし同時に漱石は、その講演などの思想的骨格を持った発言では、人間の関係の「革新」をしばしば語る（『私の個人主義』など）。決して「自然」に安住することを良しとするものではなかった。

近代日本の哲学者西田幾多郎の思想的営みは時期的にも内容的にも夏目漱石の文学と近接した位置にある。『善の研究』（明治四十四年）は主観と客観の二元論を越えることを志向して、主観客観の意識の統一的状态である純粹経験をその体系の出発点とする。出発点自体が内包する独我論的な傾向を、具体的には主観にただようエゴイズムを、西田は克服するべく思索をつづける。『善の研究』においても宗教の篇においてパウロの「すでに我生きるにあらず。キリストにありて生きるなり」など聖書の語句を引いて、宗教は主観をより大きな客観に合一することであると説く。西田はキリスト教との関わりでは、神秘主義への親近がよく話題にされるが、人間の関係に関わるキリスト教的愛の正面からの受容に目を留める必要がある。西田の問題関心は、のちに中期の『私と汝』（昭和七年）に

引き継がれる。一神教的神にはつねに一定の拒否感をただよわせる西田だが、ここでは、ニグレンの『エロスとアガペー』を参照言及しながら、キリスト教の愛の核心を理解しようとするところみている。西田の営みは、自己の哲学の体系と結構をまもりつつ、最大限キリスト教的愛を東洋的宗教観と接合しようとするものである。

近代日本において信仰と愛との関係をめぐって、キリスト教が人間の関係についてもたらした新たな視点は今に至るまで大きな影響を残している。キリスト教の外部にとつては、キリスト教の人間観は、習慣的な人間の関係に覚醒あるいはある種の違和の感覚をもたらし、それ故深い刻印を与えてきたのである。

最近、三木清を対象とする修士論文を書いた大学院生の指導をする機会を得た。またゼミでの議論をきっかけにあらためてその思想を考える機会となった。三木清の晩年の親鸞への傾倒は、三木の初期のパスカルへの傾倒と対比させたとき、興味深いものがある。キリスト教の思想とその根拠を理解しようとしながら、最後は、相交わらないでその思想を完結させた哲学や倫理的探求は数多くあるが、三木の場合もその一例となるだろう。

人間は習慣的な関係性を生きつつ、その在り方自体を対象化する能力を持っている。自己を離れ自己の環境を離れ、自己と環境世界に対して、一定の距離を置き、客観的に反省しうる人間存在の在り方を三木は耳慣れぬ用語を使い「離心性」と表現する。三木は、この語を社会学者プレスナーの“*Exentriät*”（脱中心性）の訳語として使用している。この訳語をあえて使用するのには、三木が初期のパスカル研究をとおして、信仰者パスカルの核心に近づき、「慈悲の秩序」（愛の秩序）に理解と共感を抱きながら、後年唯物論研究、歴史哲学研究を通過し、晩年母の宗教である浄土真宗と親鸞に

もどつていったことに関わっているだろう。「離心性」は三木の場合、生の根本的は窮迫性を意味し、その窮迫の終わりのなき無限性の故に、それは宗教的なものの内に至つて、より高次の生に達するものと解される。別の表現として「脱魂的」も三木は使うが、それは三木なりに即自的な魂からいわば靈性への道行の過程を見据えていた故であると読み解くことができよう。三木の場合、「離心性」は最後には人間がパトス的であることをつきぬけ、あらためてより高次の生に至る宗教性の動態の端緒となる。その意味で「離心性」は宗教的なものへの新たな根付きを遠望した用語として選ばれたものであるといえるだろう。パスカルの宗教性を理解しつつ究極的に三木が至りついた地点には、近代日本においてキリスト教に親近しながら外部にとどまった思索のひとつの形を見ることができる。

以上は、キリスト教を日本近代の知性との関わりという狭い枠内から見たときの一風景である。しかしこれらの問いかけは、とくに関係の倫理の問題は、知性にとどまらない全体的な人間の営みの広がりの中においての日本でのキリスト教の意義と意味に関わっているだろう。愛とキリスト教的倫理のたゆまぬ実践こそが、キリスト教への問いに応答するただ一つの道であり責務であることに変わりはない。